

保護者の方からのメッセージ ～小学部高学年編～

今回は、本校の小学部高学年の保護者の方2名から、メッセージを寄稿いただきました。

「この1年を振り返って」

小学校高学年ともなると、子供に自我が芽生え、「なぜ日本語学校に通わなければならないのか？」という疑問が出始める。金曜日の夜は友達とのお泊まりができない、土曜日はスポーツの試合と重なってしまう。なぜ、楽しいことを犠牲にしてまで日本語学校に通わなければならないのか？ 米国での滞在が長くなるほど、どの子供も少なからず疑問や不満を持ち始め、親もこの難題の対処に頭を抱えなければならなくなる。これは海外にしばらく滞在している家庭にとって、避けて通れない険しい道ではないだろうか。日本語学校に通う理由は千差万別であろう。日本に帰国後のための国語や算数(数学)の履修であるかもしれないし、日本語力の維持や継承言語としての日本語学習であるかもしれない。日本語学校に通う目的は多岐にわたる。どれが正しいという正解はなく、親の思いも様々で、私の悩みは、自分の子供にとって最善の選択ができていくかということだ。

金曜日の夜は毎回宿題で揉めて、土曜日は嫌がる子供を無理矢理学校に連れて行く。こんなやり方で日本語学習が本当に身に付くのだろうか。親である私自身が疑問を持ちながらも、退学＝日本語ができなくなる、という懸念と不安に胸が押しつぶされそうになる。だからと言って、子供に無理強いすることで、日本語自体が嫌いになってしまっただけは本末転倒だ。長子(現在大学生)が日本語学校に在学中には、親の希望を押し付けるだけで、何もわかろうとしてやらなかった。その失敗を踏まえ、勇気を振り絞って、末子にはとうとう、日本語学校の継続については、今年は本人の意思に任せると伝えた。すると、今までは親に無理矢理行かされていると思っていた(＝親の意思)のに、突然「自分の意思」になったものだから、子供自身かなりとまどっていた。もう誰のせいにもできないからだ。結局、末子は日本語学校からの恩恵(日本語学校の算数のおかげで、現地校で算数が得意であるなど)に考えを巡らし、日本語学校の続行を決めた。自分で決めた後は、去年は一度もしなかった宿題も今年は1ページでも提出する回数が増え、泣くのひきずって車に乗せていたのも、のらりくらりではあるが、自分から車に乗るようになった。子供に主導権を渡すことで、子供はそれに伴う責任を果たそうとする力が培われるのだと思い知らされた。来年度、また山あり谷ありになるのだろうと思うが、つまづきながらも親子で成長していけたらと思う。そしてこのような未熟な親子を励まし続けてくださり、零点のテストを何とかして零点にしない方法を模索し続けてくださった先生方に、この場をお借りして感謝申し上げたい。



『日本語を話そう』のスローガンから」

『日本語を話そう』。これはボストン日本語学校が本年度、「校内では日本語を話させる」という教育実践目標の元に、生徒に向けて掲げたメッセージです。夏休みのポスターコンクールにもなっていましたので、ご存知の方も多いでしょう。

明確な資料はないのですが、2000年以降、ボストン周辺への5年以内の短期滞在者が激減したと思います。これは複数の日本企業の東海岸からの撤退が一番の大きな理由でしょう。それに対して、10年以上の米国滞在歴のご家庭や国際結婚の方が増えてきました。

これらの事情もあってか、ここ数年は日本語学校の休み時間に英語で会話をする子供達が目立ってきたような感じを受けていました。これは、日本語で会話をする機会が限られている子供達にしてみれば、とてももったいない事だと私的には思っておりましたので、日本語学校側から『日本語を話そう』と積極的に生徒達に呼びかけてくださったのは大歓迎でした。それと同時に、このメッセージは保護者に対するものでもある、との理解もしました。何と言っても、子供達にしてみれば親とのコミュニケーションで日本語を使うことが一番多いのですから。

保護者の皆さんも、是非この『日本語を話そう』のスローガンをきっかけに、ご自身のお子様やその友達にも日本語を利用する機会を広げて行きましょう♪



ありがとう



いらっきます